

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

## 貨幣数量説とアダム・スミス

著者	奥山 忠信
雑誌名	埼玉学園大学紀要．経営学部篇
巻	11
ページ	11-24
発行年	2011-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1354/00000530/">http://id.nii.ac.jp/1354/00000530/</a>



# 貨幣数量説とアダム・スミス

## The Quantity Theory of Money and Adam Smith

奥山 忠信

OKUYAMA, Tadanobu

本稿は、アダム・スミスと貨幣数量説の関係を考察したものである。スミスが貨幣数量説をとっていたかどうかという問題に関しては、必ずしも見解は一致していないが、大方の理解は、スミスは貨幣数量説をとっていなかったということにある。親友のヒュームが完成させた説で、当時広く受け容れたれた貨幣数量説をスミスはなぜ受容しなかったのか。そこにはスミスが確立した労働価値論がある。労働価値論による価値決定を金属貨幣にも適用することで、貨幣量が貨幣価値を決定するという貨幣数量説とは異なる見解を導くことになる。アメリカ大陸の発見以降の大量の金銀のヨーロッパへの流入と価格の上昇という現象も、貨幣数量説によれば貨幣量の増加が原因であったが、スミスによれば、豊かな金や銀の鉱山の発見によるコストダウンとそれによる金や銀の支配労働の減少が、物価上昇の原因となる。

### 序 言

本稿の課題はアダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) と貨幣数量説との関係を考察することにある。スミスが貨幣数量説を採用しているかどうかについては、必ずしも意見が一致しているわけではないが、ヴァイナー (Jacob Viner, 1892-1970) の見解が一般的には受け容れられているものと考えられる。すなわち、ヴァイナーは、スミスが『法学講義』ではヒューム (David Hume, 1711-1770) の貨幣数量説を肯定的に紹介していたにもかかわらず、『国富論』においては、必要量以上の貨幣は市場から溢れ出ると認識し、ヒュームとは異なった考えを持っていたことを指摘する (cf. Viner[1965], p.87, 訳, 89頁)。また、シュ

ンペーター (Joseph A. Schumpeter, 1883-1950) は、18世紀には貨幣数量説は時代の趨勢となっていたにも関わらず、スミスがこれに立ち入らなかったことの意味は極めて重要である、と指摘している (cf. Schumpeter [1954], p.315, 訳, 第2分冊, 659頁)。

他方、アダム・スミスを貨幣数量説と考えるのは、初期のリカードウ (David Ricardo, 1772-1823) である。この時期のリカードウにとっては、自らも金鑄貨をめぐって貨幣数量説の支持者であり、そのリカードウの目にはスミスは貨幣数量説の論者に映ったのである。貨幣数量説を交換方程式に定式化したフィッシャー (Irving Fisher, 1867-1947) もまた、貨幣数量説の論者として、ロック (John Locke, 1630-1704)、ヒューム、リカードウら

---

キーワード：貨幣数量説、アダム・スミス、労働価値論、貨幣の価値、金の価値

Key words : the quantity theory of money, adam smith, labour theory of value, value of money, value of gold

と並んでスミスの名を上げる（cf. Fisher [1916], p.14, 訳18頁）<sup>1)</sup>。

本稿では、アダム・スミスはヴァイナーやシュンペーターが言うように、貨幣数量説はとっていないと考える<sup>2)</sup>。その上で、スミスが貨幣数量説から離れた理由を探ることが本稿の課題である。そこには貨幣価値の決定論をめぐる労働価値論と貨幣数量説との対立があると考えからである。

貨幣数量説についての見解は多様であるが、シュンペーターは次のように定義する。

「現在のわれわれの目的からして貨幣数量説は次のように定義される。第1に、貨幣の数量は独立変数（an independent valuable）であり、とりわけ、価格や物的な取引量からは独立して（independent）変動する。第2に、流通速度は制度的な与件（datum）で緩慢に変化するかあるいは全く変化しない。しかし、どのような場合にも価格や取引量からは独立している。第3に、取引量—あるいは産出量と呼びたいのだが—は、貨幣量とは関係しない。この2つが一緒に動くのは偶然である。第4に、貨幣量の変化は、同一方向の産出量の変化によって吸収されない限りは、増加した貨幣がどのように使用されるか、そして経済のどの部門に最初に影響するか、とは関係なく機械的に影響する。貨幣が減少する場合も同様である」（Schumpeter[1954], p.704, 訳, 第4分冊, 1474頁）。

貨幣数量説は、たんに貨幣量と物価の比例関係を言うだけではなく、明確な因果関係があること、その因果関係とは、貨幣量が貨幣価値すなわち物価を決めるのであってその逆ではないことである。

## I 貨幣数量説の形成と批判

### 1. ロックの貨幣数量説

はじめに、スミス以前の貨幣数量説の状況を考察する<sup>3)</sup>。貨幣数量説の起源は古いといわれているが、「貨幣数量と物価の関係に関する最初のまとまった説明のひとつは、ロックにある」（Elis[1995]）という見解は、妥当な理解であろう。ロック（John Lock, 1632-1704）の場合、貨幣数量説の考え方は、明確な形で現れている。

象徴的な一文は次のとおりである。

「現在、世界には、銀が当時の10倍存在するので（西インド諸島の発見が銀を豊富にした）銀は今では当時よりも10分の9価値が小さい。すなわち銀は、今では、販路に対して200年前と同じ比率を保っているどの商品とも、10分の9少なく交換される」（Locke [1963a], p.47, 訳, 71頁）。

ここにはいくつかの注意が必要である。すなわち、ロックは盲目的に黄金欲を肯定して金銀貨幣をためこもうと欲していたのではなく、当時の直面する課題であった貨幣不足の問題を解決し、経済活動に必要な貨幣を獲得することを経済学の課題としていた。貨幣数量説はそのための理論的分析のひとつとして展開される。

ロックは、貨幣の起源について次のように言う。

「すなわち人類は金銀に、その耐久性と希少性、およびたやすく偽造されにくいと言う理由で、想像的価値（imaginary value）を与えることに同意し、一般的合意によって（by general consent）金銀を共通の保証物にした」（*Ibid.*, p.22, 訳, 31頁）。

社会契約論の論者としてのロックは、国家

を契約によって導いたと同じように、貨幣も人間の合意に成立したと考える。問題はその価値についてであり、その価値はあくまでも想像的(imaginary)なものだと考えるのである。

ロックは、貨幣の価値も商品と同じように、数量(quantity)と販路(vent)によって決まると考える。一般商品も貨幣も、需給関係によって決まる、と考えていたのである。しかし、貨幣と一般商品とは事情が異なり、貨幣は誰でも受け入れるので、「貨幣の販路は常に十分にあるか、あるいは十分以上である。したがって、その価値を規定し決定するには、その量だけで足り、他の商品のようにその数量と販路との間のいかなる比率をも考慮する必要はない」(*Ibid.*, p.45, 訳, 69頁、cf.p.40, 訳, 61頁)というのである。貨幣は商品のように売れ残ることはない。流通市場から溢れ出ることはない。したがって、貨幣の価値は需給関係次第でどのようにも変動することになる。

とはいえ、ロックは現実には、貨幣の販路と量とは緩慢にしか変化しないので、貨幣を商品の価値の「不変の尺度(standing measure)」(*Ibid.*, p.44, 訳, 67頁)、と考えている。また、ロックの場合、市場に貨幣を流入させることによる経済の活性化が基本的な課題であり、この視点から取引量との関係での貨幣量が問題になる。貨幣数量説は取引量一定の仮定を設けることが多いが、ロックはそうではない。すなわち、「いかなる国においても貨幣の価値は、その国の現在の取引(the present trade)に比しての現在の流通貨幣量(the present quantity of the current money)である」(*Ibid.*, p.49, 訳, 75頁)、と考えられていたのである。そしてロックは、マン(Thomas Mun, 1571-1641)などによって形成された貿易差額主義

を継承して、この政策を肯定し、金銀を国内に流入させて貨幣の不足の問題を解決しようとしたのである。

ロックは、金銀貨幣を富と考えており、貿易差額論によって貨幣を国内に流入させようとした点では重商主義者であるが、その意図するところは、金銀貨幣の蓄積に国力の増強ではなく、取引に必要な貨幣を国内に流入させることによって経済を繁栄させることにあった。

## 2. ヒュームの貨幣数量説

ヒュームの貨幣数量説は、重商主義に対する批判と新しい経済学的确立という明確な意図のもとに展開されている<sup>4)</sup>。

ヒュームの『政治論集』(*Political Discourses*, 1752)は、専制的な国家を批判して重商主義に代わるシステム、すなわち自由な経済システムによる経済の発展を企図していた。そのシステムとは、何よりも「物事のより自然な通常の道筋(natural and usual course of things)」(Hume[1955], p.10, 訳, 17頁)に基づく経済である。それは人間の欲望を刺激し、勤労を促すシステムであり、こうした経済の基礎となる産業は、ヒュームにとっては現に発展しつつある商業と製造業そして奢侈産業であった。ヒュームは、現に進行しつつある現実の経済の中に新しい時代の到来を見ていたのである。

重商主義に対する批判は、貨幣の本質論で明確になる。すなわち、貨幣を富とする重商主義に対して貨幣を道具とみなすのである(cf. *Ibid.*, p.33, 訳, 48頁)。そして、ヒュームは、貨幣の価値を「擬制的な価値(fictitious value)」とし「その量が多いか少ないかは何の影響もない」(*Ibid.*, p.48, 訳, 70頁)、と言う。貨幣量の増大が物価の上昇に帰結するという貨幣数量説を取ることによって、重商主義の

ように貨幣の増加を目指すことは、意味のないことになる。

とはいえ、この場合、ロック同様にヒュームにとっても貨幣量が多いかどうかは取引される商品量に依存する。すなわち、「物価が一国民における商品の絶対量と貨幣の絶対量に依存するというよりは、むしろ市場にもたらされる、あるいはもたらされうる商品の数量と流通する貨幣量とに依存する、ということも自明のことである」(Ibid., p.42, 訳, 60頁)、と言う。鑄貨が金庫にしまい込まれたり、商品が倉庫に退蔵されるならば、価格には影響を及ぼさないからだと言うのである。

また、ヒュームは一方では、貨幣量の増加は物価を上昇させるだけで経済には影響しないといういわゆる貨幣の中立性を指摘するが、他方では増加した貨幣がまんべんなく国内にいきわたるまでの中間期間においては、個々人の貨幣の取得と物価の上昇のラグから、経済を刺激する効果を生むとし、貨幣を増加させる政策を推奨する (cf. Ibid., p.38, 訳, 54頁, pp.39-40, 訳, 57-58頁)。

他方、ヒュームは自由貿易の下での国際的な産業の均衡的な発展について述べる。その第1は、一国における貨幣量の増大は物価の上昇をもたらし、このことは交易条件を悪化させ、貨幣の流出を招く、といういわゆる金銀貨幣の国際的な自動調節機構である。もっとも、国際間の貴金属の移動の問題、すなわち貴金属貨幣が高く評価される国に向けて流出するというシステムは、貨幣数量説というよりは、貴金属本位制の下での裁定取引のシステムの問題である。第2に、ヒュームは、貨幣の増大によって価格が上がって交易条件が悪化すれば、資本が海外に移動すると言う。次のようである。

「製造業は、次第にその立地を変え、自らがすでに富ませた国や地方を離れて、食料と労働との安価によって誘われるところならどんな国や地方でも飛んでゆく。そして製造業は、これらの国や地方をも富まし、今度も同じ原因によって駆逐されることになる」(Ibid., p.34, 訳, 50頁)。

いずれの経路を辿っても、重商主義の貿易差額主義によって貨幣を意図的に国内に流入させることは意味のないことになる。

とはいえ、いくつかの注意が必要である、ヒュームは「貨幣の相対的な豊富から何らかの利益を得るのは国家だけであり」(Ibid., p.33, 訳, 48頁)、として、戦争や外交交渉に際しては貨幣量の多さが大きな意味を持つことを指摘する。この視点から紙券を批判する。ヒュームは、紙券の使用が国内の物価を上昇させて金銀を流出させ、戦争などの非常時には、国民に不利益をもたらす、と言うのである (cf. Ibid., pp.67-68, 訳, 97頁, Ibid., p.35, 訳, 51頁)。

こうした考えは、ヒュームの貨幣論にはそぐわないものであるが、この問題の解決策、すなわち金銀を流入させてかつ物価を上げない方法として、批判されて当然の政策と付言しながらも、「莫大な金額を国庫に集めて錠を下ろし、その流通を完全に妨げることである」(Ibid., p.72, 訳, 104頁)と言う。意図的な金銀貨幣の退蔵による不胎化策を示唆している。

### 3. スチュアートによる貨幣数量説の批判

スチュアート (James Steuart, 1713-1780) は大著『経済の原理』(An Inquiry into the Principles of Political Economy, 1767) 第2部第2編第28章のなかで、貨幣数量説をモンテスキューとヒュームという政治論の巨匠の見解であり、わかりやすく優れた見解であり、



ほとんどすべての者が、この見解を採用していることは間違いないと紹介して上で、これを批判している (cf. Stueart[1998], II, p.72, 訳, 上巻, 357頁)<sup>5)</sup>。

ステュアートの貨幣数量説批判は多岐にわたるが、その第1の視点は、貨幣量の増加が需要に結びつくとは限らない、ということにある。

「富（金銀貨幣を指す・・・奥山）が増加したというのに、需要の状態がもとのままで、何の変化も見せないとしたら、その時は追加された鑄貨はおそらくしまい込まれるか、あるいは食器類に変えられてしまうであろう」(Ibid., p.78, 訳, 363頁)。

貨幣の増加が需要の増加に結びつかなければ、鑄貨は退蔵されるか、貴金属製品にされるかして、鑄貨としての機能を止めてしまうと考えるのである。また、貨幣の増大が需要の増加に結びついたとしても、供給が増加する場合は、価格の上昇には結びつかない。貨幣数量説が成立するのは、貨幣の増加が需要の増加に結びつき、供給が対応しない場合に限られることになる。

ステュアートにとってもっとも看過できなかったのは、ヒュームが紙幣に対して低い評価を与えたことである。すなわち、先に見たようにヒュームは貨幣数量説をとる一方で、国家的な視点からは有事に備えて貴金属貨幣をより多く持っていた方がいいと考えており、紙幣の増加は金銀貨幣の流出を招くとして、これを批判していた。しかし、ステュアートは、貨幣と鑄貨との概念を区別し、貨幣を価値尺度（計算貨幣）と定義して、アムステルダム銀行券を取り上げ、この中に不変尺度としての貨幣の理念を見ていた。『経済の原理』の後半体系が貨幣と信用の分析に当てられて

いるように、信用制度の発展こそは、ステュアートの最も主要な関心事であった。この点で、ヒュームとは相容れない立場にあり、このためステュアートは、ヒュームの見解は、「信用を崩壊させる計画 (a project to destroy credit)」(Ibid., p.86, 訳, 370頁)として、これを激しく批判したのである。

また、貨幣が増加したとしても、その貨幣は、財産に比例して行き渡るわけではなく、特定の人、すなわち富裕層が貨幣をかき集めることになり、その結果、生活資料と奢侈財およびそれに従事する勤労者に異なった影響を与えることを指摘する。さらに、商品の価格の変化は商品によって多様であり、貨幣量に比例して上がるとは限らないとし、貨幣数量説を「哲学的ではあるが、商業的ではない」(Ibid., p.90, 訳, 同前, 373)、と批判する。

そして、貨幣の増加ではなく貨幣の減少に言及し、日常的に流通に用いられている貨幣を減少させることは、流通を阻害し、勤労者に損害を与えると言う。その理由は、「以前の量（貨幣の量・・・奥山）が流通と勤労者とを住民の欲求と欲望に比例させておくのにちょうど足りていた、とわれわれは想定しているからである」(Ibid., p.91, 訳, 同前, 374頁)、と言う。市場には適正な貨幣量があり、その減少は価格の下落というよりは経済そのものにダメージを与える、と考えているのである。

## Ⅱ アダム・スミスの貨幣論

スミスの『国富論』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776) は、「第1編」の第1章から第3章までを分業の分析に当てている。分業論が、スミスの経済学体系の端緒をなすのである。スミ

スは、第1章では分業の効率性をピン製造業などの事例で説明する。そして第2章では分業は人間の英知（human wisdom）の結果ではなく、人間の本性（human nature）の中にある性向（propensity）であり、その性向とはいわゆる交換性向（to truck, barter, and exchange one thing for another）である、とする。この交換性向を、スミスは、すべての人間に共通で他のどんな動物の種類にも見られないもの、すなわち人間に特有の性向と見ていた（cf. Smith[1981], p.25, 訳, 第1分冊, 37頁）。

交換は、自分の欲するものを手に入れる際には、極めて効率的である。すなわち自分の欲するものを持っている人の好意を得て、贈与によってその財を手にもすることもできるが、しかし、いつもそのような時間があるわけではない。通常は他人の慈悲心（benevolence）に期待しても無駄であり、交換を提案して彼らの利己心（self-love）を刺激する（interest）ほうが有効だと考える（cf. *Ibid.*, p.26, 訳, 同前, 38頁）。スミスにとっては、交換それ自体が、他人の利己心に訴えることで自分の欲するものを得る効率的な方法と見なされていた。

こうした分業と交換のシステムは、第3章によれば相補的に発展する。すなわち、市場が狭ければ、分業を細分化してひとつの仕事に特化するという動機は働かず、結局、市場の広がり分業の発展は、歩を一にして発展していくと考えられている。スミスにとっては、分業の発展こそが生産性の発展および国富の増進の基礎である。重商主義が貨幣を富と考えてその増加を目指したとすると、スミスは分業の発展による国富の増進を目指していた（cf. *Ibid.*, p.31, 訳, 同前, 43頁）。スミスの貨幣論は、これを前提に展開される。

スミスは、「第4章 貨幣の起源と使用について」で、貨幣の生成と本質を明らかにする。すなわち、分業の発達、自分の生産物のうちの自己消費部分を少なくし、自己消費部分以上の余剰を多くする。そして、誰もがこの余剰部分を他人の労働と交換することで生活するようになる。すなわち、分業の発展が交換を発展させ、このことが人々をある程度商人とするようになり、社会は「商業社会（commercial society）」（*Ibid.*, p.37, 訳, 同前, 51頁）となると考える。

分業の発展によって交換も発展するが、物々交換では、交換力（power of exchanging）は阻害される。スミスの例では、酒屋とパン屋が肉を欲していても、肉屋が既にパンとビールと持っていれば交換は成り立たない。この不便を解決するために、貨幣が登場する。それは、スミスによれば、自分の生産した生産物以外に、交換を拒否することがないだろうと想像される労働生産物（the produce of industry）を、いつも一定量（a certain quantity）手元に置く（have at all time by him）、ということである。この意味で貨幣は商業の共通の用具（common instrument of commerce）である。（*Ibid.*, pp.37-38, 訳, 同前, 51-52頁）。

貨幣を富ではなく道具と見なす貨幣＝道具説、またこの見解が重商主義に対する批判を意味している点はヒュームと同じである。しかし、貨幣が道具であることの意味は注意が必要である。貨幣は富ではなく道具であるといった場合、貨幣は流通手段として市場を転々としているという機能に限定されているのではなく、常に一定量手元に置くものとして扱われているということである<sup>6)</sup>。貨幣数量説において貨幣が価格に影響すると考える場合には、貨幣が流通において使用されるこ

とが前提である。保蔵された貨幣は価格の決定には参加しない。スミスの場合には、貨幣を使用するために手元におくものとして一括しているのでこの貨幣の規定からは、ただちにはヒュームのような貨幣数量説は導くことはできない。

この共通の用具の役割は、家畜や貝殻などさまざまなものが果たしてきたが、最終的には金属そして金や銀が貨幣の役割を果たす。保存性・耐久性、分割と合成が可能であること、均質性、などなどさまざまな点で貨幣の機能に適合しているからである。

### Ⅲ スミス価値論と貨幣

スミスは第4章の最後に価値を2つに分類する。それは「特定の対象物の有用性 (the utility of some particular object)」と「その対象物の所有を譲渡する<sup>7)</sup> ことによる他の財を購買する力」(the power of purchasing other goods which the possession of that object conveys) である。スミスは、前者を「使用価値 (value in use)」、後者を「交換価値 (value in exchange)」<sup>8)</sup> と呼ぶ (cf. *Ibid.*, p.44, 訳, 同前, 60頁)。この使用価値は、効用価値論という効用ではなく、商品ごとの使用上の差異をいっているのだ、その商品を使用することによって得られる満足度とは異なる。すなわち使用価値は商品ごとに異なるので、相互にその量を比較することはできない。また、交換価値は、他の商品に対する購買力であって、ひとつの商品のなかで完結する概念ではなくひとつの商品と他の商品との関係である。

スミス価値論は、貨幣論に続く2つの章、「第5章 商品の実質価格と名目価格について、すなわちその労働価格と貨幣価格について」および「第6章 商品の価格の構成部分

について」で展開される。本稿の課題である貨幣の価値は第5章で規定される。

スミスの価値論について、リカードウは投下労働 (the quantity of labour bestowed) と支配労働 (the quantity which it can command in the market) という2つの標準尺度 (standard measure) を立てていとし、投下労働で一貫すべきであった、と主張するのである (cf. Ricardo[1951a], pp.13-14, 訳, 16頁)。リカードウにとっては投下労働と支配労働はともに価値尺度であり、スミスは量的に一致するとは限らない2つの尺度を採用している点で混乱している、と解釈したのである。

『国富論』の第5章は、尺度論を課題としている。すなわち、分業の発達によって自己消費部分が減少するとその分だけ交換に依存する部分が多くなるので、人々は彼らが支配することのできる労働量あるいは購買することのできる労働量によって、貧しかったり豊かだったりする。この意味で、投下労働ではなく支配労働を尺度基準として選択しているのである。リカードウの言うように投下労働と支配労働とを2重の尺度基準としているわけではない。

しかし、『国富論』において投下労働は意味のない存在ではなく支配労働の前提として重要な役割を演じている。スミスは、すべての商品の「実質価格 (real price)」は、それを獲得する上での「労苦 (toil and trouble)」である、と言う。そして、既にそれを得ている人にとっては、「自分自身が節約 (save) でき、そして他の人々に課す (impose upon) ことのできる労苦 (toil and trouble)」である、と言う (Smith[1981], p.47, 訳, 第1分冊, 63頁)。



スミスの *toil and trouble* を一般的な意味で労働に還元すれば、実質価格として述べられているものは、自分でそれを獲得する（生産する）場合の労働である。これは自分にとっての投下労働である。また、これを持っていて、交換によって獲得しようとする人にとっては、他人の行う投下労働という意味で支配労働ということになる。ただこの場合も、この表現からは支配労働は2つの意味を持っている。それは、他人の持っている生産物に投下された労働と、他人が行う労働という意味である。労働者は例えば5時間労働の生産物である穀物と交換に5時間以上の労働をすることは可能であり、この2つの支配労働は異なった概念である<sup>9)</sup>。

価値の尺度として意味を持つのは支配労働であるが、スミスにあっては、投下労働は支配労働の前提となっているといえることができる。この意味で、労働こそがあらゆるものに対して支払われた最初の価格(*the first price*)、本源的購買貨幣(*original purchasing-power*)、といわれるのである (cf. *Ibid.*, p.48, 訳, 第1分冊, 64頁)。

とはいえ交換に際して、労働時間を実際に検証することは現実的ではない。この点は投下労働も支配労働も同じである。現実の交換では、価値尺度の役割は貨幣が果たす。しかし、労働時間そのものは変動しないが、貨幣の価値は常に変動する。スミスは次のように言う。

「それ自体の価値が絶えず変動している商品はけっして他の商品の価値の正確な尺度ではありえない。・・・手に入れにくいもの、つまり獲得するのに多くの労働を要するものは高価であり、手に入れやすいもの、つまりわずかな労働で手に入れられるものは安価で

ある。だから、労働だけが・・・究極的な真実の尺度である。労働はそれらの商品の実質価格であり、貨幣はたんにその名目価格にすぎない」(*Ibid.*, p.51, 訳, 同前, 58頁)

労働時間は、現実的な価値尺度ではないが、真の尺度として、『国富論』での理論的な分析に大きな役割を果たす。

#### IV 貨幣数量説との関係

##### 1. スミスにおける貴金属の価値

地金論争期のリカードウは、スミスを貨幣数量説の論者と考えている。リカードウは初期論稿のひとつ、「地金の高い価格 (1810)」の中で、次のようにいう。

「スミス博士は述べている。『効用 (*utility*)、美しさ (*beauty*)、および希少性 (*scarcity*) という性質は、それらの金属の高い価格の、すなわちこれらのものがどこにおいても多量の財と交換されるということの本来的な基礎である。』」(*Ricardo* [1951c], pp.52-53, 訳, 65頁)。

「スミス博士は述べている。『貴金属が最も潤沢な鉱山であっても、世界の富にほとんど何も付け加えないであろう。その価値が主にその希少性から生み出されるところの生産物は、潤沢になれば必ず価値が低下する』」(*Ibid.*, p.53, 訳, 66頁)。

リカードウは金や銀の価値決定に際しては、希少性が重要な意味を持ち、このために通常の商品の価値論とは異なった価値の決まり方をする、と考えていたのである。この時期のリカードウは、いまだ労働価値論をとっていないが、後年『経済学および課税に原理』において、労働価値論を採用する場合には、独占的な商品に関しては労働によって価値が決定されるわけではないと考え、労働価値論の

考察対象外としている。その上で『原理』でのリカードは、金や銀の価値決定にも労働価値論を適用する見解を示している。

しかし、そうであるとなると、初期リカードの取り上げた、スミスの希少性による貨幣価値の決定問題は、『国富論』においてはどのように考えられていたのであろうか。スミスは次のように言う。

「彼ら（金持ち・・・奥山）の目からすれば、いくらか有用であったり美しかったりするものの値打ち（merit）は、その希少性によって、つまりそれをかなり多量に集めるのに必要な多量の労働、つまり彼ら以外誰も支払うことのできない労働によって高められる」（Smith[1981], p.190, 訳, 第1分冊, 301頁）。

スミスは、希少な物の獲得にはそのための労働が必要だと考えているのである。宝石についても同様である。

「宝石に対する需要は、その美しさから生じる。・・・またその美しさという値打ちはその希少性によって、つまり鉱山から取得するときの困難さと費用によって、大いに高められる」（*Ibid.*, p.191, 訳, 同前, 302頁）。

希少性によって価値が高まる背後により多くの労働が対応しているのである。スミスの場合には、希少性は労働価値論と矛盾するものではなかったといえる。

## 2. スミスと貨幣数量説

スミス自身は、貨幣数量説に立ち入った論評をしていない。しかし、ヴァイナーは、スミスが『法学講義』ではヒュームの理論を紹介していたにもかかわらず、『国富論』においてはヒュームの貨幣数量説にもとづく物価と貨幣の配分に関する国際的な自己調整メカニズムに言及せず、必要以上の貨幣は市場から溢れ出ると認識し、ヒュームとは異なって市

場に必要な貨幣量という考えを持っていたことを指摘する（cf. Viner[1965], p.87, 訳, 89頁）。

ヴァイナーが言う『法学講義』でのアダム・スミスは、ヒュームの貨幣数量説から、貨幣量の増加が物価の上昇につながることを肯定的に紹介する（Smith[1978], p.507, 訳, 315頁）。しかし、同じ『法学講義』の中で、スミスはダイヤモンドの価格について次のようにいう。

「もし商品が稀少であれば、価格は上昇するが、もしその量が需要に供給するのに十分以上であれば、価格は下落する。こうして、ダイヤモンドやほかの宝石が高価であり、他方で鉄が、はるかに有用であるのに何倍か安いのは、このためなのである」（*Ibid.*, p.496, 訳, 288頁）。

『法学講義』においては、価格はもっぱら需給関係と希少性によって決まると考えられていた（cf. *Ibid.*, 同前）。こうした価値論は、初期のリカードが言うように、貨幣数量説を受け容れていたとしても理論的な整合性はとれている。しかし、『国富論』では、周知のとおりダイヤモンドの高い価格と水の安い価格との問題は、有用性や希少性ではなく、労働価値論の問題として説かれている（cf. Smith[1981], pp.44-45, 訳, 第1分冊, 60-61頁）。そして、先に論じたように、『国富論』におけるスミスは、投下労働を前提に支配労働を価値の真実の尺度と位置づける。『国富論』におけるスミスの貨幣価値論は、「地金の高い価格」や「ペンタム評注」におけるリカードのスミスに対する理解とは異なっているのである。

『国富論』における貨幣に関する価値規定は次のようなものである。

「金銀は、他のすべての商品と同じように、

その価値が変動し、時によって安価だったり、高価だったりする。つまり時によって購買しやすかったり、しにくかったりする。ある特定の金銀が購買または支配しうる労働の量、つまりそれと交換される他の商品の量は、そうした交換が行われるときにたまたま知られている鉱山の豊度が高いか低いか(the fertility or barrenness of the mines)<sup>10)</sup>に依存している。アメリカ大陸の鉱山の発見は、16世紀に、ヨーロッパの金銀の価値をそれ以前の3分の1に引き下げた。それらの金属を市場に運ぶのにより少ない労働しかかからなかったから、それらが市場に運ばれたとき、より少ない労働しか購買または支配できなかった」(Ibid., p.49-50, 訳, 同前, 67頁)。

貨幣の価値は貨幣の数量によって決まるのではなく、鉱山の豊度にもとづく。すなわち採掘と運搬に必要な労働量に依存しているのである<sup>11)</sup>。この見解は貨幣数量説とは異なる。

しかも、ここにスミスの投下労働と支配労働の関係が、明瞭に出ている。アメリカ大陸の豊度の高い鉱山では投下労働が少ないので、ヨーロッパにもたらされた時の支配労働は少ない、と語られているのである。アメリカ大陸の発見に伴う価格革命は、大量の金銀がアメリカ大陸からヨーロッパに流れ込んだという数量の問題ではなく、アメリカ大陸の鉱山の産出コストが低いことにある、とスミスは考えたのである。

紙幣と金属貨幣の混合流通を説いた次の箇所も、このことを示している。

「金銀の価値と他の何かの財の価値との割合は、すべての場合、どこか特定の国で流通している特定の紙幣の性質あるいは量に依存するのではなく、たまたまある特定の時期に商業世界という大市場にそれらの金属を供給

している鉱山が豊かであるか乏しいかに依存する。それは一定量の金銀を市場に持ってくるのに必要な労働の量と、一定量のどれか他の種類の財を市場に持ってくるのに必要な労働の量との割合に依存するのである」(Ibid., pp328-329, 訳, 第2分冊, 106-107頁)。

さらに、いわゆる価格革命について次のように言う。

「アメリカの鉱山の発見がヨーロッパを富ませたのは、金銀の輸入によってではない。アメリカの鉱山の豊富さによって、それらの金属は以前よりも安くなってしまった」(Ibid., 447, 訳, 同前, 290)。

貨幣数量説を広める契機になったといわれる価格革命について、スミスは労働価値論の確立によって対案を準備していたのである。スミスの労働価値論は、貨幣数量説に対立する理論としての意味を持っていたのである。

さらに、金や銀の価値の決定問題には、もう一つの問題がある。金や銀の価値が独占的なものかどうかという問題である。この点に関して スミスは、「どの鉱山の金属価格も、現に稼働している世界でもっとも多産な鉱山での金属の価格によって、ある程度規制される」(Ibid., p.185, 訳, 第1分冊, 295頁)として、金や銀の価値は、世界的な競争関係におかれていると認識している。スミスによれば、炭鉱などの価値は、鉱山の豊度と位置に依存するが、貴金属の場合は、位置に依存することは少なく、豊度に依存する。貴金属は高価値のため遠距離の輸送経費の負担にも耐えられ、「金属鉱山の生産物は、もっとも遠く離れていてもしばしば競争しあうことがありうるし、また事実普通に競争しあっている」(Ibid., p.185, 訳, 同前, 294-295頁)のである。そして、「ペルーの鉱山の発見の後、ヨーロッパの銀

山はその大半が廃坑になってしまった」(Ibid., p.185, 訳, 同前, 295頁)、と言う。金や銀は、いわゆる独占状態ではなく、激しい競争関係に入っている、と考えられているのである。

金や銀の貨幣が貨幣数量ではなく、労働によって規定されているとすれば、貨幣量はどのように決まるのであろうか。スミスは一国に蓄積されている貨幣を、流通している貨幣、家庭にある金銀の食器、国庫に貯えられている貨幣、の3つに分けた後で、流通している貨幣について次のように言う。

「一国で年々売買される財の価値は、その財を流通させ、本来の消費者に配分するために一定量の貨幣を必要とするが、それ以上の貨幣を必要とすることはできない。流通の水路(channel of circulation)は、それを満たすに足りる額の貨幣を必然的に引き寄せはするが、それ以上はけっして受け容れない」(Ibid., p.441, 訳, 第2分冊, 279頁)。

市場の取引量が、一定の貨幣量を引き寄せると考えているのである。貨幣数量説の場合は、貨幣量は一国の市場にとって多くても少なくとも関係はなく、適正量の概念は存在しない。貨幣それ自身の価値がその量によってどのようにでも変化するからである。しかし、スミスは労働価値論の採用によって、適正な貨幣量の概念を市場の取引量から導くことになる。貨幣量が価格を決定するのではなく、市場の取引が貨幣量を決定する。労働価値論の採用が貨幣数量説とは逆の結論を導いたといえる。

## 結 語

以上のように、アダム・スミスは投下労度を前提に支配労働を真実尺度とする労働価値

論を採用する。このことによって金や銀の貨幣の価値も労働によって規定され尺度されると考える。これは、貨幣量が貨幣価値を決定するという貨幣数量説の貨幣価値決定論、すなわち物価決定論とは対極の考え方である。

アダム・スミスは、モンテスキューやヒュームによって貨幣数量説が確立し、それがジェームズ・ステュアートによって包括的に批判された後に『国富論』を刊行している。ステュアートの貨幣数量説批判は、貨幣数量説が貨幣量の増加を需要の増加と直結しない場合があること、需要の増加に供給が対応する場合があること、貨幣量が増加しても金持に集中するなどしてまんべんなく広がるとは限らないこと、など多彩な論点にわたっていた。そして、貨幣数量説批判のひとつとして、市場には適正な貨幣量があるという指摘も行っていた。この最後の点が、スミスによって貨幣数量説批判として前面に打ち出される。スミスは、労働価値論の確立によって、市場にある商品が労働を前提とした価値を持ち、金や銀の貴金属貨幣もまた同様の価値をもつと考えることによって、必要以上の貨幣を市場は受け容れない、という見解に達した。この見解は、『経済学および課税の原理』におけるリカードウ、そして、マルクスへと受け継がれることになる。

## 注

- 1) 堂目卓生 [2008] は、スミス理論の解説のなかに貨幣数量説を含めている。
- 2) Niehans [1987] は、スミスがヒュームの貨幣数量説を否定したことを紹介した後で、ヒュームの貨幣数量説は特殊なケースであると認識している。貨幣数量説についてはステュアートが貨幣数量



- 説は広く受け容れられているとしていること、初期のリカードウが貨幣数量説を明確にとっていたことから特殊な理論であったとは考えにくい。なお、Foley, Duncan [2006]、参照。
- 3) ロックの貨幣数量説については、奥山 [2010b] 参照。
- 4) ヒュームの経済学については、奥山 [2011] 参照。
- 5) ステュアートの貨幣数量説批判については、奥山 [2009] 参照。
- 6) この表現はフィッシャーの $MV=PT$ （M：貨幣量、V：流通速度、P：価格、T：取引量）のVではなく、マーシャルの $M=kPy$ （y：実質所得、k：名目所得に対する貨幣の保有割合）のkを想起させる。しかし、スミスは貨幣数量説に対しては批判的である。
- 7) 水田訳は「その物の所有がもたらす他の品物を購買する力」（訳60頁）と訳しているが、conveyは、所有者に購買力をもたらすのではなく、譲渡に際しての購買力を意味すると考えられる。
- 8) スミス価値論をめぐる研究動向については、渡辺恵一 [2010]、参照。
- 9) 第6章では、いわゆる初期未開の社会においては、投下労働と支配労働が一致するが、資財や土地の占有を前提とする社会では、利潤や地代の分だけ投下労働と支配労働が乖離することが述べられている。この乖離が剰余になる。そして、この場合の支配労働は、他人に課すことのできる労働の意味である。
- 10) the fertility or barrenness of the mineの部分を水田訳『国富論』は、「産出量の大小」（67頁）と訳している。金や銀の支配労働すなわち価値が鉱山の「産出量」に依存するという訳は、訳者の意訳であり、スミスが貨幣数量説をとっていたかのような誤解を生む。産出量が多いかどうかではなく、産出から運搬までのコストが安いかどうか、あるいは労働が少ないかどうかの生産性の問題であるため、本稿ではこの部分の訳を変更した。同様に、水田訳では、「貴金属の量はどの国でも2つの異なる原因によって増加しうる。すなわち第1には、貴金属を供給する鉱山の産出高（he

increases abundance of mines）の増大…ある国の貴金属の産出高の増加（the increases abundance of mines）から生じる限り、この増加はその価値のいくらかの減少と結びついている」（Smith [1981], p.207, 訳, 第1分冊, 328-329頁）、という訳も見られ、スミスが貨幣数量説を追認したように見られるが、abundanceは、鉱山の「豊かさ」ではないかと考えられる。この前のパラグラフで、スミスは、銀の量の増加に応じて銀の価値が減少するという見解をpopular notionと呼び、この見解は根拠がない（groundless）、としている。明確な貨幣数量説批判と考えられる（*Ibid.*, p.207, 328頁）。

11) 「どの種類の鉱山でも、豊鉱といわれるか貧鉱といわれるかは、一定量の労働によってそこからもたらされる鉱物の量が、同一量の労働によって同じ種類の他の大部分の鉱山からもたらされるものよりも、多いか少ないかによるだろう」（*Ibid.*, p.182, 290-291頁）。

## 文献リスト

- Blaug, Mark [1995], 'Why is the quantity theory of money is the oldest surviving theory in economics?', *Quantity Theory of Money*, Blaug, Mark, et al. Edward Elgar, Cheltenham, UK.
- Elis, Walter [1995], 'John Lock, and the quantity Theory of Money and the establishment of a sound currency', Blaug, Mark, et al., *The Quantity Theory of Money*, Edward Elgar.
- Fisher, Irving, [1916], *The purchasing Power of Money: Its Determination and Relation to Credit Interest and Crises*, The Macmillan Company, New York（『貨幣の購買力』、金原・高木共訳、改造社、1936）。
- Foley, Duncan K, [2006], *Adam's Fallacy*, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts/London（『アダム・スミスの誤謬』、亀崎澄夫他訳、ナカニシヤ2011）。
- Hollander, Samuel [1973], *The Economics of Adam Smith*, University of Toronto（『アダム・スミス



- の経済学』、小林昇監訳、東洋経済新報社、1976)。
- Hume, David [1955], 'Political Discourses', 1752, *Writings on Economics*, ed. by Eugene Rotwein, University of Wisconsin Press (ヒューム『経済論集』、田中敏弘訳、東京大学出版会、1967)。
- Keleher, R. E., [1991], 'The Use of Market Prices in Implementing Monetary Policy: The Bullionist Contribution', *Southern Economic Journal*, 58(1)。
- Laidler, David [1991], *The Golden Age of Quantity Theory of Money*, Harvester Wheatsheaf (『貨幣数量説の黄金時代』、嶋村紘輝他訳、同文館、1991)。
- Locke, John [1963a], 'Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money', 1692 *Works of John Locke*, vol.5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen (『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会、1978)。
- [1963b], 'Further Considerations concerning Raising the Value of Money', 1695 *Works of John Locke*, vol.5, 1823, rpt. Scientia Verlag Aalen (『利子・貨幣論』、田中正司・竹本洋訳、東京大学出版会)。
- Mun, Thomas [1986], *England's Treasure by Foreign Trade*, 1664, rpt. by Augustus M. Kelley (『外国貿易によるイングランドの財宝』渡辺源次郎訳、東京大学出版会、1965)。
- Niehans, Jürg [1987], 'Classical monetary theory, new and old', *Journal of Money, Credit and Banking*, 19(4)。
- [1990], *A History of Economic Theory – Classic Contributions 1720-1980*, The Johns Hopkins University Press, Baltimore and London。
- Ricardo, David [1951a], 'On the Principles of Political Economy And Taxation', *Works and Correspondence of David Ricardo*, ed., by Sraffer, Piero, Cambridge University Press, vol. I, (『経済学および課税の原理』、『リカード全集』第I巻、末永茂喜監訳、雄松堂、1970)。
- [1951b] 'The Price of Gold', *Works and Correspondence of David Ricardo*, 1951, vol.Ⅲ (『金の価格』、『リカード全集』第Ⅲ巻、末永茂喜監訳、雄松堂、1970)。
- Ricardo, David [1951c] 'The High Price of Bullion', 1810, *Works and Correspondence of David Ricardo*, vol.Ⅲ (『地金の高い価格』、『リカード全集』第Ⅲ巻)。
- Schumpeter, Joseph A. [1954], *History of Economic Analysis*, George Allen & Unwin, London, (『経済分析の歴史』全7巻、東畑精一訳、岩波書店、1955-1962)。
- Smith, Adam [1981], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, original edition, 1776, ed., by R.H.Campbell and A.S.Skinner, Liberty Fund, Dianapolis (『国富論』水田洋監訳、岩波文庫、全4分冊、2000-2001)。
- [1978], *Lectures on Jurisprudence*, ed.by R.L.O.Meek, et al., Oxford University Press, rpt., Liberty Fund (『法学講義』水田洋訳、岩波文庫、2005)。
- Steuart, James [1998], *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, ed. by A. S. Skinner, 4 vols. Pickering&Chatto, London, 1998. Original published, 1767, *Collected Works of James Steuart*, 1805, 7vols. Routledge/Thoemmes Press, 1995. 小林昇監訳『経済の原理』、名古屋大学出版会、上巻(第1・2編)、1998、下巻(第3・4・5編、1993)。
- Jacob Viner [1965] *Studies in the Theory of International Trade*, original edition 1937, rpt., Augustus M. Kelley, 1965, p.87, (ジェイコブ・ヴァイナー『国際貿易の理論』、中澤進一訳、勁草書房、2010年、参照)。
- 奥山忠信 [2009]、『ジェームズ・ステュアートの貨幣数量説批判』、『埼玉学園大学紀要経営学部編』、第9号。
- [2010a]、『金貨幣の合理性に関する考察』、『政策科学学会』、創刊号。
- [2010b]、『ロックの貨幣数量説』、『埼玉学

園大学紀要経営学部編』、第10号。

—— 奥山忠信 [2011]、「市場における貨幣量の  
役割－David Humeの貨幣論」、奥山・張編『現  
代社会における企業と市場』所収。

越智良一 [1998]、『アダム・スミス貨幣論の研究』、  
青葉図書。

佐藤有史 [2003]、「古典派貨幣理論—古い解釈と新  
しい解釈—」、『経済学史学会年報』、第44号。

堂日卓生 [2008]、『アダム・スミス—「道徳感情論」  
と「国富論」の世界』、中央公論新社。

星野彰男 [2010]、『アダム・スミスの経済学』、関  
東学院大学出版会。

馬渡尚憲 [1997]、『経済学史』、有斐閣。

渡辺恵一 [2010]、「スミス労働価値論の再読」、大  
阪経済大学『大阪経大論集』、第61巻第1号。